

特集

コロナに克つⅡ ～つながりを紡ぎ続ける

新型コロナウイルス感染症の世界的流行がはじまってから、3度目の春を迎えた。コロナと向き合ったこの2年間を振り返ると、私たちがもっとも戸惑ったことの一つは、コミュニケーションの制限ではなかっただろうか。対面で密なコミュニケーションによって培われていた私たちの「つながり」は、そのための機会を大きく制限されることになった。しかし一方で、そうした制限のなかでも、インターネット等のICTを活用して「つながり」を作る動きも広がった。コロナ禍においても、私たちは互いにつながりあうために努力を続けてきたのである。本特集は、そうした新しい「つながり」の作り方をテーマとした。

特集のはじめには、元京都大学総長の山極壽一氏にご登場いただき、ご自身の専門であるゴリラ研究の知見を踏まえながら、人間社会における「つながり」のあり方について語っていただいた。そのうえで、コロナ禍において、「つながり」を紡ぐ事例として、産直eコマースであるポケットマルシェ、数ある協同組合の中でも随一のフォロワー数を誇るJA全農のSNSアカウント、コープ九州事業連合が展開するインターネットサイト、そして大学生協の食堂事業の挑戦を取り上げ、その実態を検討・紹介していただ

いた。また、コロナ禍の中で、とくに大きな影響を受けた大学生のリアルを知るために座談会を企画した。いずれの論考も、コロナ禍において「つながり」を紡ぐために奮闘する事業者や協同組合、そして一人ひとりの現状を伝えるものとなっている。

日本では、年明けから拡大したオミクロン株による「第6波」がピークアウトしつつあり、3月下旬には全国のまん延防止等重点措置も解除される見通しとなっている。世界では、イギリスなどヨーロッパ各国でコロナ関連の規制が緩和・撤廃されているが、韓国などのアジア諸国では過去最多の感染者数が記録されている。ワクチン接種が進展し、治療薬の開発も進んではいるが、まだしばらくはコロナと向き合う日常が続いていくであろう。本特集をきっかけに、コロナ禍における、そしてコロナ禍以降の協同組合の特徴である組織や組合員の「つながり」について、読者の皆さんに一考していただければ幸いである。

(本誌編集長 加賀美太記)